
BABY☆パニック！

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A B Y ☆ パ ニ ッ ク !

【Nコード】

N 8 4 9 9 G

【作者名】

y o s h i n a

【あらすじ】

警察キャラが多めの多分コメディ風。高佐テイストの千葉一人称。何事も勢いが大事です（真顔）

いち／まさかの千葉視点／

今日はもう、近所の吉牛で大盛り食べてから帰ろうかなあ。

俺、千葉は深夜の強盗事件犯人の緊急逮捕で吹き出た汗をハンカチで拭きながら、夜空を見上げた。

午前二時。本当なら、この時間まで開いていたラーメン屋で一杯いくつもりだったんだ。

腹減った。

嗚呼、ラーメンが遠のきました。

「あまりそんなため息をつかないでくれるか、千葉君。せっかく犯人を捕まえたのに、こっちまで気分が下がるじゃないか」

「あ、すみません……」

隣で白鳥さんがいつもよりも低い声でつつこんでくる。

後ろの強面刑事集団からも「一番若いのに何シケた面してんだ」と笑われる。

今回はこのメンバーでの捕り物劇だった。

本当なら日暮警部がするところなんだけど、今日は非番。

そんな日に白鳥さんと俺とで、愛車クラウンでの都内巡回中偶然ばったり見覚えのある顔を見つけてしまった。

数日前、コンビ二強盗犯として指名手配に載せられた男の顔を。

他の事件で巡回してたけど、俺たちは慌てて警視庁に残っているメンバーを呼び寄せて、男が路地裏に入ったところで確保した。

相当抵抗されたおかげで、今はくたくただ。ついでにお腹の虫も増幅中だ。

やっぱメタボってるのかなあ、俺。

以前もそう高木さんに言ったら、この世のものとは思えないものを見るかのような目で見られた。

心外だ。

そんなこんなで、俺たちは本庁に戻った。
疲れたし、腹も減ったけど、手柄は入った。
これで気持ちよく吉牛に行こう。

むさくるしいメンバー（口には出さないよ、絶対！）で、どやどやと捜査一課の部屋の中に足を踏み入れた。

するとそこには、むさくるしさを吹き飛ばす紅一点、先輩女刑事の椅子に座る姿が。

あれ、佐藤さんって確か二十四時で終わりじゃなかったっけ？

二十一時終わりの高木さんまでいるし。

残業かな。

仕事熱心だなあ。

俺も汗かいてる場合じゃないなあ。

降りる電車、一駅前にして歩こっかなー。

俺の思考回路はそんな方向へ進んでしまった。

そんなことよりもっと「信じられない」光景が目の前に広がってるのに、だ。

「ねえ、ちょっと唸ってない？ 給湯室の牛乳持ってくる？」

「ああ、牛乳はダメですよ。まだこれくらいの時は専用のものを飲ませないといけないんで」

「あら、詳しいじゃない」

「いや、昔実家で、よく近所から預かって僕も手伝ってたんで」

「へえー。あ、今ちょっと笑った」

「可愛いですね」

「あうー」

ひとときわ甲高い声が、捜査一課に控えめに響いた。
控えめで可愛らしくて、思わず頬を緩ませてしまうような……

「あ、赤ちゃああああああああああん!!!!??」
??」

そう、赤ちゃんを抱いた佐藤さんを優しく高木さんが見守るとい
う、絵に描いたような新婚カップルがいたのだった。

え、本物？

いきなり新婚さん？

白鳥さん以下先輩刑事たちの目玉は飛び出したままだ。

人間の目ってホントに飛び出せるんだな。

いや、それよりも。

「腹、減った……」

嗚呼、牛井も遠のきました。

にトメさんはなんでも出来る人」

この部屋には一番似合わないだろう、その小さな存在に、俺たちはただ口を開けてぱくぱくするしかなかった。

当然、中に居る佐藤さんと高木さんはこちらに気付く。

佐藤さんは赤ちゃんを抱いたまま、きょとんと目を丸くした。

「あらどうしたの白鳥君。まぐろの開きみたいな顔しちゃって」

いや、まぐろの開きみたいな顔ってどんなんですか佐藤さん。

心の中でだけでそのツツコミをすると、白鳥さんがはっとして咳払いをする。

「それはこちらの台詞です。その、あっ赤ちゃんこそどうしたのですか？」

あ、噛んだ。

赤ちゃんと言う存在があまりにも衝撃的だったのだろうか。

この質問には、隣で立つ高木さんが返答する。

「佐藤さんの車に居たんです」

「ええ？」

これには思わず、俺も聞き返す。

車の中に居たってことは、つまり誰かが置いたってことなのか？俺も含めた全員の頭に、ハテナマークがぴこーんとつく。

佐藤さんがそのまま説明を続けた。

「私二十四時上がりだったでしょ？それで二十一時上がりだった

高木君を駅で拾って居酒屋行こうとしたんだけど、」

何気にいちやついてますねお二人さん。

まあ、それは置いといて。

「途中公園で大騒ぎする沈酔状態のグループを見つけてさ。あまりにも大きな声だったし、高木君と一緒に注意しに行ったのよ。それから十分位して、グループを公園から出させて車に戻ったら、この子が後部座席に居たってわけ。ドア開けたときホントびっくりしたわー」

ねえ？ と佐藤さんは腕の中に居る赤ちゃんに問いかける。

赤ちゃんは「あう」と返事なのかただの発声なのかわからない二文字を出した。

どうやらこの子はこの二文字をよく出すらしい。

「それで僕達、一旦警視庁に戻ったんです。この赤ちゃんに見覚えがないし、誰かが車の中に入れて立ち去ったってことですし、事件がらみの可能性を考えまして」

急いで公園の中に入ったから、車のカギはかけてなかったと高木さんは付け足した。

確かに今は深夜だし、交番に「迷子です」と届けるよりこちらに来たほうが正しいだろうな。

でもそれなら、届け出るのは生活安全課なんだろうか。

それとも事件性ありなら刑事課？

「ああ、なんだそうだったのか……俺はてっきり」

「ばっ馬鹿言え！ そんなありえないことは天に誓って口に出すんじゃないねえ！」

「そうだそうだ。それにあのひょろい高木にそんな甲斐性はねえよ」

俺の背後で何気にひどいことを、先輩方がひそひそと言い合うのが聞こえてくる。

いや、その前に普通に昨日も佐藤さん出勤じゃないですか。いきなりベビーはおかしいっすよ。

実は聞こえていたのか、高木さんがこっちをジト目で見ていた。そのジト目をスルーして、白鳥さんが歩み寄って赤ちゃんを観察する。

「なるほど、そういうことでしたか。ではとりあえずこの子を今晚どうにかしないといけないですね。佐藤さんのことですから、赤ちゃんを見つけた後すぐ周りを見に行っただけでしょう？」

「ええ。でも誰も見当たらなかったわ。車から約十分間離れてたし、置き去りにしたのは私達が戻る数分前だとは思うけど」

「だったら今夜中に解決するのは無理でしょう。ふむ、病院に連れて行って一応健康状態を見てもらって、そのまま預けるか……」

「体なら大丈夫よ。さっきトメさんが来て、赤ちゃんの目を見て『良好！』って言うってくれたから」

赤ちゃんの鑑識までするんかトメさん。すげーなおい！

「でも、どこかには預けないといけないんじゃないですかねえ」

高木さんも少し眉間にしわを寄せて天井を仰ぐ。

ここにも仮眠室はあるけれど、流石にベビーベッドは無い。

赤ちゃんはちゃんとした部屋で寝たほうがいいのは、独り身の俺でもわかる。

それに人の出入りが多いから、お世話する人がいない。

背後の先輩刑事たちも、思案して唸り始める。

赤ちゃんだけが珍しそうにこちらのを見ている。

俺たち、君の事で悩んでいるんだけどなあ。わかるかな？ 何が
あったんだい君。

すると、赤ちゃんは視線をひょいと佐藤さんに移した。

あ、今目えそらした！

「うーん、だったらさ」

成長したら絶対子悪魔になると俺を確信させた、その子を抱いた
佐藤さんはことも何気にこう言った。

「私が預かるうか？ この赤ちゃん」

にくとメさんはなんでも出来る人」（後書き）

鑑識という言葉の間違って使用している自覚はあります（爆）
こんな感じでゆるく続きます。

さん／＼トンカチ持つ松本さんって刑事というよりむしろ犯（以下略）

次の日。

捜査一課の日当たりの良い窓際に、ベビーベッドが置かれていたとき。

用意早！

「哺乳瓶の用意良し、オムツの替えも良し。あ、佐藤さんこれで大丈夫です」

「わかったわ、ありがと。ひかるくん、私たち出るから安全課に行くわよー」

「あうー」

佐藤さんがベッドの上から手を振ると、ひかると呼ばれた赤ちゃんは両手をぱたぱたさせた。

この名前は、黄色のベビー服の袖に縫い付けられていた文字からきている。

ひかると呼んだら反応するから、きっとこの子の名前なんだろう。佐藤さんが確認したら男の子だったそうだ。（どこで確認したかは想像にお任せね！）

それにしても、どこから見てもママとベビーだ。

手際よく安全課に渡すミルクを用意する高木さんも様になりすぎて、逆にびっくりだ。

前日の夜（厳密には今日の午前三時頃だけ）、佐藤さんがこの子を預かると言う和一斉にみんなが反対した。

「忙しい職業なんだから」とか「美和ちゃん、まだ子育てしたことないんだから大変だよ」とか一般論を言って説得しようとした。まあ正直なところは、高木さんと合わせての親子化を危ぶんだのだと思うけど。

佐藤さんはその意見に、むうと眉をひそめていた。
でもそこに手を差し伸べるのが、あの某恋人なわけで。

「夜勤を暫く無しにしてもらって、昼も安全課をお願いして預ければ何とかなりそうじゃないですかね。それで、夜は佐藤さんが家で寝かせて朝一緒にここに来るとか」

事件性がある以上、結局この子は本庁に何回かは来ないといけないんですし、と高木さんは提案した。

佐藤さんがぱあっと笑って「それならいけそう」と喜ぶものだから、他の刑事たちも無理に反論することはできなかった。

そして今に至る。

佐藤さんがここに出勤して、外に出るまでは安全課ではなく、このベビーベッドに寝かすことにしたそうだ。

ちなみにこのベッドは、珍事件を聞きつけた、なんと松本監理官が持ってきたものだ。

娘さんが昔使っていたものだとか。

とはいえ、すぐに持ってくるなんて、意外と監理官は子煩悩だったりして？

トンカチ持ちながら、ひっじょーに恐ろしい目つきと雰囲気でも愛らしいベビーベッドを組み立てる様は、中々面白かったけどさ。

自分が透明人間ならば写メに撮ってるところだった。

「では警部、この子が置き去りにされた場所近辺の聞き込みに、高木君と行ってきます」

「うむ、頼んだぞ」

俺がそんな阿呆な回想をしている間に、佐藤さんと高木さんは赤ちゃんを連れて捜査一課から出て行った。

二人がいなくなると、一気に部屋の雰囲気は抜けたものになる。
なんかみんな、あの二人と赤ちゃんがいるときはそっちに集中が
いってしまって気が気でならないらしい。

いや、仕事しようよ。

「うーん、美和ちゃんと赤ちゃんっていう光景も美しいっちゃ美しいなあ」

「ああ、心が和やかになるよ……」

「あの場に高木さえいなけりゃなあ」

「あいつは背景と捉えろ。壁と一緒だ」

「なるほど！」

うわあ、すごい言い様。

それから暫くは、普通に時間が過ぎて行った。

俺は事件の資料をまとめ、おにぎりを食べ、資料をまとめ、チョコを食べていた。

え？　なんかおかしい？

いやあ、俺何かを噛んでると頭が一層働くんだよ。ほんとほんと。
甘いものを食べていると、コーヒーが飲みたくなったので、席を
立つ。

そして自販機コーナーへ行くために、一課の入り口を出ようとした。

その時、何気なく床に染みついたシミを見つめながら歩いていた
俺の視線に、四本の足が見えた。

二本はハイヒールを履いた足。きれいだ。

残り二本はずっと磨いてなさそうな、てかりが全くないローファ
ーを履いている。

後者はともかく、捜査一課紅一点の佐藤さんではない女性のおみ
足に、視線を上にあげた。

するとそこには、肌の白い、薄く化粧を施したスーツ姿の美人がいた。

隣に色黒の剣呑な雰囲気を纏った隻眼の男もいる。

え、どちらさま？

見覚えのない二人に、入り口付近で俺が立ちすくんだままできると、男が咳ばらいをした。

「あー、長野県警のもんだ。事件の資料を借りに来たんだが、担当は誰だ？」

あ、思い出した。今俺がやってる資料がそれだ。

やっべー、まだもうちょっと時間かかる！！

「えーと、あの、お疲れ様です。ひとまず中に入ってください」

とりあえず、中に通して、目暮警部のところに連れていく。

二人は大和、上原と名乗り頭を下げる。

次に顔を戻した時には、二人とも警部の後ろのほうにある「あれ」に目がいつていた。

「……なんであんなところにベッドが」

怪訝な目つきで大和警部がつぶやくと、俺のそばで「あー」という聞きなれた甲高い声がした。

俺が振り向くと、安全課の婦警さんがひかるくんを抱いて立っていた。

赤ちゃんの声にびっくりして大和警部も振り返る。

つられてひかるくんが目をぱちくりとさせて、彼を見た。

瞬間、視線が交り合う。

ベビー・ミーツ・オッサン。

運命の出会いかのように、一瞬無が二人を包む。

しかしそれを破ったのは血の気の引いた顔をした大和警部だった。

「――っ!! 帰る!!」

「あら駄目よ敢ちゃん。仕事なんだから」

「あうあう?」

「こっ…こっち見んじゃねえー!!」

あー、なんかまたややこしいことになってきました。

さんゝトンカチ持つ松本さんって刑事というよりむしろ犯（以下略）（後書き）

赤ちゃんを日中捜査一課と安全課で預かるくだりは・・・現実性云々のツツコミはスルーの方向で・・・（爆）

次話は長野県警コンビです。

よんゝ迫りくる魔の手と男の悲劇ゝ

「敢ちゃん、刑事になりたての頃、保育園に潜入捜査することがあったね。保育士として行ったわけなんだけど、そこでいろんな子供にいろんなところから寄ってたかられて、おしくらまんじゅうみたいに敢ちゃんぎゅうぎゅうに詰められて、子供アレルギーになっちゃったのよ」

保育園に潜入捜査ってどんなだ。

この強面の人が、うさぎさん柄のピンクのエプロン着て子供たちと……やめとこう。そんな想像は強制終了だ。

まあそれはさておき、そんな稀有な悲劇を経た大和警部は、現在俺と俺のデスクの隣、つまり高木さんのデスクの椅子に座る上原さんから10メートルくらい離れた場所でぽつんと立っている。

ひかるくんは上原さんの腕の中だ。

佐藤さんから安全課に預けられたひかるくんがなんでこっちに戻ってきたかという、ある物的な証拠(?)が見つかったからだ。

刑事課に顔を出した婦警さんはひかるくんを抱きながらこう聞いてきた。

「この子の服、どなたか着替えさせてます?」と。

蒼い顔をした大和警部の隣で目暮警部が首を横に振る。まだひかるくんがここにきて一日経ってない。

今日聞き込みにいった高木さんと佐藤さんがついでに服を買ってくるので、今は昨日と同じ服を着ていた。

それを聞いた婦警さんは神妙な顔つきで目暮警部にひかるくんを差し出した。

「この子の肌着の裾に、御守りみたいなのが縫い付けてありました。まだ着替えてないってことは、この子のお母さんがつけたんじゃない

いでしょうか」

上のプレオールをぺらりとめくり肌着を確認すると、確かに手製の「おまもり」と刺繍の入ったアプリケみたいなのがついていた。

名前の刺繍と言いおまもりといい、この子のお母さんは手芸が得意だったのかな。

目暮警部と俺がそのおまもりをじっと見つめていると、傍から上原さんが「ちょっと失礼します」と言っておまもりを指でなぞった。「……中に何か入ってますね」と彼女が言うので俺も触る。かさり、と中で何か紙のような音がした。

おまもりをはがそうとしたが、普通の大きなハサミで肌着を切るのはちょっと怖い。

捜査一課でソーイングセットを持ってる人がいなかったのも、婦警さんが安全課から持ってくるまでの間、ここにひかるくんは待つことになったというわけだ。

「それにしても、かわいそうね。こんな五〇六ヶ月の赤ちゃんが置き去りにされるなんて」

お行儀よくすやすや眠るひかるくんを腕に抱き、上原さんは浮かない顔で言う。

同情というより、母性本能みたいなのがそういう顔をさせるのかもしれない。

「だが、母親は育児放棄で手放したというわけでもねえな。名前の刺繍や手製のお守りを縫い付けるくらいだ。手放さざるを得ない事情があったとみて間違いねえ」

「敢ちゃん、そんな隅っこのほうでカッコつけて言われても聞こえないわ」

「うるせえ、それに今は大和警部と呼べ、上原」

ひかるくんから背を向け、壁に向かってやたら渋く男前な声を出す大和警部に上原さんがつつこんだ。

いや、つつこむ時点で聞こえてるじゃないですか上原さん。あなた、何気にこの状況楽しんでませんか？

心の中でさらにつつ込む俺の内なる声が聞こえたのか、大和警部の剣呑な態度は俺のほうにも飛んでくる。

「おい、それよりも千葉！」

「は、はい！！」

「早く資料片付けろ！ 何ちんたらやってんだてめえ」
「す、すみませんっ」

いけないいけない。この二人が来たのは俺がまとめてる事件の捜査資料を借りるためだった。

あわてて机に向かおうとすると、再びその手を止めさせる婦警さんの声がした。

ソーイングセットを持ってきたようだ。

大和警部には悪いけど、なんか今日は仕事ができない日みたいだ。婦警さんは上原さんが抱くひかるくんを見つけて、こちらに足早に寄ってきた。

寝ているひかるくんを起こさないように、慎重におまもりを縫い付けている糸を切っていく。

お守り自体は三センチくらいの小さなものだったので、すぐに取れた。

お目当ての紙は、さらに小さくたたんであり、しわがいくつもよっていた。

ひかるくんが動いたせいだろうか。

目暮警部もいつの間にか傍に来ていて、上原さんが開いた紙を見

た。

予想通り何かが書いてある。

「……元気に育ってください、か。シンプルな文章だな」

目暮警部が読んだ一文が紙面のすべてだった。

はたから見ればそっけない文章かもしれない。だけど、逆にその一文にいろんな思いが込められている気もして、俺は何だか切なくなつた。

「つまり、それ以外のことは書けなかったということだな。置き去りにさせた自分の息子にもそれしか言えない。その紙の細かいしわは濡れてから乾いた後にできるものだ。母親の流した涙かもしれない」

いつからそこに。

気配を消したかのように音もなく、上原さんの背後に来ていた大和警部が鋭い見解を述べる。

だいぶ腰が引けてたけど。

やっぱり気になつたらしい。――が、その好奇心があだとなつた。

ぱちり。

自分のお母さんの言葉がきつかけとなつたのか、ひかるくんの大きな目が開いた。

そして、最後に声のしたほう、つまり大和警部へ視線を移したのだ。

ベビー・ミーツ・オッサン・アゲイン。

ここからは、みんなもうすす展開がわかるだろう。

いきなり何を思ったのか、ひかるくんは勢いよく上原さんの腕か

ら肩によじ登った。

そんなに動けたのかひかるくん。

俺の驚きもよそに、そのままアクティブな赤ちゃんは、彼女の肩の真上にある、大和警部の腕に……

ぽんっ

「う、上原ああああああああああ！！！！！！！！！！俺の、俺の腕を切れー！！！！！！！！」

今週のジャンプ（五月二十二日現在）のブーチみたいなセリフとともに、彼はひかるくんに触られた腕をもう片方の手で押さえ絶叫した。

押さえたとところから蕁麻疹みたいなのが出てる。

うわあ、ご愁傷さま。

「このソーイングセットのハサミでよかったら切るわよ」

「ま、待ちたまえ上原くん！」

真顔で凶器を持つ上原さんを、あわてて目暮警部が止める。

やっぱり楽しんでるよ、上原さん！

ホラー映画のほうな絶叫をする大和警部はよろめいて、そのまま俺のデスクに腰をつき資料をひっくり返した。

ちよ、それ俺が一時間かけて整理したやつ……！

そんな様子を見て、ひかるくんは腕を上下に振って笑っていましたとさ。

ああ、早く帰ってきてください佐藤さん高木さん。

閑話休題　一方その頃の佐藤高木はというと、みたいなく

『寄り道せずに戻ってきてもらえると、とってもありがたいです』

千葉から来たメールを見て、高木は首をかしげた。

「何か事件でもあったのかな……」

「事件なら目暮警部から呼び出しがあるんじゃない？」

佐藤の意見になるほど、と思い彼は携帯の画面をぱちりと閉めた。またお菓子がどっかあっただの、一緒にご飯食べにこうだの、そういった類だろうと彼は思った。

先日も酔っぱらい集団を抑えるためにやってきていた公園で、高木と佐藤はベンチに座っている。

一、二時間ほどの公園周辺で聞き込みをしたが、急に赤ちゃんもしくは母親父親が失踪したという情報は無かった。

「この辺じゃないとすれば、遠くからやってきて何らかの理由で私の車にひかるくんを置いたってことよね」

「ええ。でもなんで置いたのがわからない以上、探そうにもどこからどう探せば……」

「置いた理由は排除して、違った見方から考えたほうがよさそうね」

しかしその肝心の見方とは、どこから見たものか。

さすがの佐藤も行き詰ってしまい、手中の缶コーヒーをぐっと握った。

その様子を黙って高木は見ていたが、暫くして口をあけた。

「それにしても佐藤さん。どうしてあの子を預かると言ったんです

か？」

前々から思っていた疑問である。

状況からして、提案自体は不思議なものではなかった。

捜査担当者が預かっておけば、何かあった時にすぐ確認できるという利便性はある。

しかし、それさえ除けば病院や施設で預かってもらっても別に問題はない。

正直なところ、あの赤子は彼女が預かる必要はないのだ。

なのに、佐藤は自ら引き受けた。

公私をきっぱり分ける彼女にしては珍しい、と高木は考えていた。その考えを読み取ってか、佐藤は右手を顎にあて、少し考える仕事をした。

「うーん……私自身、はっきりとしたことは言えないんだけどね」

そして缶をくるくると手の中で弄ぶ。

「あの子には、誰かが傍にいとかないと駄目だと思ったの」

「病院の人とかではいけないんですか」

「ええ。なんていうか、あの子にはあの子だけの存在が必要なんじゃないかって」

缶がぴたっと止まる。

「私には高木君がいる。それと同じようなものがあの子にはいないといけない。だから預かったの」

「そう、だったんですか」

改めて告白されたような気がして、高木はうつむいた彼女には気

づかれない程度に、照れつつ頷いた。

そして彼女の意見をもとに、思い返してみる。

あのひかると名づけられた赤子を。

そういえば、あの子は彼女にだっこされながらいつも視線がうろついている。

あたりを見渡しているみたいだが、好奇心からくるものではない。あれはおそらく、親を探しているのだ。

目一杯の愛情を注がれていたのであろう子供。

目一杯の愛情を注いだのだろう母親。

なぜかそこに父親の想像はできず、彼は天を仰いだ。

雲をつかむような捜査状態だった。

閑話休題　一方その頃の佐藤高木はというと、みたいな　（後書き）

高佐テイストが足りない、ということだ（笑）
次どの警察キャラ出そうかなとか考えてます。

じゅーさんじゅー！

今日も今日とて、捜査一課の一室にはひかるくんはいた。

ここにやってきて三日目。だいぶ一課の人たちのひかるくんの存在に慣れてきたようだ。

「よしひかる。夏といえばソバだ。柔らかいし食うか！」

「だ、だめですよ！ ソバアレルギーだったらどうするんですかっ」

先輩刑事がコンビニで買ってきたソバを食べさそうとして、あわてて高木さんが止めている。

俺はよくわからないんだけど、赤ちゃんには食べさせないほうが
いいものもあるらしい。

牛乳も駄目だしね。

赤ちゃんって不思議だ。

いや、俺も昔は赤ちゃんだったところがあるんだけどね。

そんなことを思いながら、焼肉弁当を食べていると、やたら耳にドカンとつつ込んできそうな大声が部屋に響いた。

「どうもお疲れ様です！ 静岡県警の横溝といいます！」

あまりの大きさに、あたりが一瞬静まり返る。

その時を逃さないかのように、全く同じ声がたたみかけてきた。

「うるせえ！ そんなに張り上げなくても聞こえるだろ」

大声の男の後ろから同じ声、かつ同じ顔の坊主の男が耳の穴を抑えながら入ってくる。

おお、双子!!

「あら、あなたは確か神奈川県警の……」

「ああ、横溝だ。こっちは兄貴だ。先日こちらでお縄になったストーカー男の件で来たが、直接一課に来てよかったか？ 兄貴がずんずん進むから来ちまったが」

「ええ大丈夫よ。じゃあ別室で調書の控えを渡すわ。あ、静岡県警と神奈川県警二つ分いるわね。もう一部コピーするから待っていてくれないかしら」

「はい！ よろしくお願いします！」

「あーうるせえー」

佐藤さんが顔見知りの神奈川県警横溝警部にそう言って、席を立った。

俺も神奈川のほうの横溝警部なら知っている。

何度かあちらの県警本部に捜査で行ったことあるしね。

静岡県警のお兄さんのほうは初めてだったけど。

そういえば、ある女性をストーカーして男が静岡、神奈川、東京を転々としながら追いかけていた事件があったな。

あれの捜査か。

確か犯人は佐藤さんのバックドロップで捕まったはず。

「しつこい男は嫌いよ！」とか叫んで見事な技が決まっていた。

でもあれは逮捕術じゃなくて、ふつーにプロレス技。

……きつと、高木さんとプロレス観戦して技を覚えたんだろうな
！……

「おや、あそこにいる子は迷子ですか？ ベッドまでありますが」

おっと、やっぱりひかるくん注目するか、横溝兄。

弟さんも目を丸くする。

「まさか誰かの子供か？」

「そりゃあ誰かの子ではあるでしょうけど、佐藤さんの車の中になぜか置き去りにされていた子どもなんです。わけあって、今は捜査一課で預かっています」

高木さんが事情を説明すると、興味深そうに双子の刑事はひかるくん近寄った。

今ひかるくんはベッドの上で、年配の刑事が持ってきた木製の馬（手作りらしいよ）をいじって遊んでいる。

「またややこしそうなこったな。目星はついているのか」

「いえ、さっぱり。どこから来たのか、どうして来たのか、見当もついていません」

「それはかわいそうだな……」

元来純粋な人なんだろう。

横溝兄が眉を八の字に下げてひかるくんを見下ろす。

弟さんは少し腕を組んで同じく見つめた後、高木さんに言った。

「見つかった時、どんな服着てたんだ？」

「え、服ですか？ ええと、ちよつと待ってください……ああ、これですこれ」

高木さんがデスクから写真を持ってくる。

発見された時、ひかるくんが着ていたベビー服が映されたものだ。現物は一応監識にいつてる。

渡された写真を見て、横溝弟は片眉を上げた。

「こりゃー、ブランド物のやつだな。結構な値段がしたはずだ」

「そうなんですか？」

「ああ、よくデパートに入ってる店の服だ」

一目でわかるなんてすごいな弟。

あれ、でもこの人って……

「おや、重悟。お前子供いないのに詳しいじゃないか」

「……別に詳しくても悪くはないだろうが」

その歯切れの悪さに、お兄さんの顔がぱあっと明るくなった。

「お前！　もしかして奥さんがついに……」

「ああーもううるせえなー！！　それがどうした！！」

「どうしたも何も、やったじゃないか！　何で早く言わないんだ！

ああそうだ、帰りに赤飯買って帰ろう！！　ついでに父さん母さんにも言うぞ！！」

「だあー！　そうやって騒ぐから言わなかったんだろうが！　それに、さすがに親父やお袋には言っている」

「何い！？　兄にだけ言わないとはなんて兄不幸な奴だ！」

「誰のせいでそうなったと思ってんだ！」

いつの間にか弟さんも大声になってるよ。

うん、お二人さん。めでたいのはわかるし、大きな声になるのもわかるけど、ここ一応東京の警視庁なんですけど。

同じ顔の大人の二人騒ぐ様子を下から見上げて、ひかるくんがきよんとしてる。

どうやってこの大声ツインを收拾つけたらいいんだ、と俺や周りの刑事たちが茫然と立ちすくむさなか、隣で「彼」がぽつりとつぶやいた。

「……いいなあ」

「あら、何がいいの、高木君」

「いっいえっ特に何がというか、全体的にというか…」

はつきりとしなない高木さんを横に、調書を持った佐藤さんが小首を傾げた。

あーあ、こちらの収集も早くつかないもんでしょうかね？

いっさんじゅいっ (後書き)

横溝弟の奥さんはねつ造です (笑) 映画でのこの双子がツボでした。

ろくろ千葉の脂肪と梓の天然く

横溝ツインズの騒ぎの夜、俺は喫茶店ポアロで遅めの夜食を取っていた。

この喫茶店の上はあの名探偵毛利小五郎の事務所なんだけど、そういうのとは関係なしに、ここには最近よく通っている。

うーん、ミートスパゲッティが美味い。

「赤ちゃん、ですか？」

「うん、全然手当たりがなくてさ。どんなに小さなことでもいいから、何か聞いたことないかな？」

ポアロの看板娘、榎本梓ちゃんは俺の前に水の入ったコップを置いてから、考える仕草をした。

地元根付いた喫茶店、というのは情報が集まりやすいところだ。ご飯ついでに聞いたんだけど、梓ちゃんは真剣に考えてくれて、マスターにも「何か聞いてます？」と言ってくれた。

厨房の奥から「聞いたことないねえ」という回答が返ってきて、梓ちゃんはしゅんとする。

「あ、別に何もないならいいからねっ。むしろ何もないほうが良いことなんだから」

あわててフォローを入れると彼女はぱつと笑う。

「千葉さんはいい人ですね！」

天然なのか、真正面からまじまじ見詰めながら言うものだから、こっちが逆に目をそらしてしまう。

：いや、うん、やっぱり人って本心からのほめ言葉って照れるじゃん？

気持ちを紛らわすために水をぐいと一気飲みする。
それを見届けてから、梓ちゃんは俺に逆に聞いてきた。

「あの、その赤ちゃんって刑事さんの車の中に置かれたんですよね」
「ああ、うん。そうだよ」

そこで一瞬間をおいてから、彼女は純粋な疑問を口にした。

「それってー、刑事さんの車だってことわかってて置いたんですか？」

え？

俺はスパゲッティを巻いていたフォークを持つ手をぴたっと止めた。

そういえば、確か置き去りにされた時佐藤さんと高木さんは――

「うん、たぶんそうだと思う。公園で騒ぐ若いグループに警察ですって名乗って止めてたらしいし」

これは佐藤さん本人から聞いたことだ。

「はいはい、警察よー。それ以上大きな声出したら豚箱つつこむわよー」と、シャレにならないことを言いながら宥めていたそうだ。
ひかるくんが置かれた覆面パトカーは、一見普通の車にしか見えない。

でも親がその佐藤さんの声を聞いていたのなら。

警察よっていう佐藤さんの言葉を聞いていたのなら。

……あれ、なんだろう。

こんなこと最初からわかっていたはずなのに。

改めて梓ちゃんに言われると引つかかるところがあるような気がする。

急に黙り込んだ俺に気づかず、梓ちゃんはそのまま何の他意もなく言った。

「じゃあ、その置いた人は助けてって言うてるのかもしれないね」
「え、ええっ!?　なんで?」

何気に梓ちゃんすごいぞ。

「だって刑事さんの車だってことわかって置いてたんですよ。普通に子供を放棄するなら、病院とか施設に置くはず。でもわざわざそんな車に乗せるってことは、刑事さんに気付いてほしかったんじゃないかなあ。もし私が何か危険な目にあって、それを周りの人に伝えられない事情があるなら、黙って警察にお手紙書いて入れちゃうかも」

あ。

思わず俺は口をあんどりと開けた。

そうか、そうだったんだ。

何で佐藤さんの車にひかるくんが置き去りにされたのか。

それは、警察に何かを伝えたかったんだ。

何かを知ってほしかったんだ。

お守り袋に入った紙にも書けなかった、子供にも伝えられない何かを。

それはいったい何なんだ?

相変わらずフオークにスパゲッティを巻いたまま、俺は考え込んだ。

「あ、でも、これは私が今ただ思ったことをそのまま言っただけで

すからっ！ 真に受けないでくださいね」

微動だにしない俺に、梓ちゃんがあわてるが、今度は俺が心の底からの賛辞を送った。

「……いや、俺も刑事だから逆に気付かなかったよ。そうか、民間人の立場から見れば、刑事の車に何かを残すのは、そういう意図があるのかもしれない。ありがとう梓ちゃん！ うん、すごいよ！！」
「そ、そうなんですか……？」

興奮気味に言ったからなのか、若干のけぞりつつ彼女は小首をかしげる。

目の前に置かれた夜食は少し冷め始めてたけど、俺の頭は回転で熱くなり始めていた。

ろくろ千葉の脂肪と梓の天然く（後書き）

千葉と梓ちゃんっていうのも・・・いかがでしょうか・・・（笑）

なな／＼ウエルカム・絶望／＼

ポアロから警視庁に戻った俺は、興奮気味に佐藤さんと高木さんに梓ちゃんの推理を伝えた。

佐藤さんは唸りながら、首をひねった。

「刑事である私の車に敢えて子供を乗せた。つまり、事件性が高まったってことかしら」

「は、はい。俺はそうだと思うんです」

高木さんにだっこされてすやすや寝ているひかるくんを見て、佐藤さんは目を細めた。

でもそれは赤ちゃんを愛でる見方ではなく、観察するような視線だった。

どうやら佐藤さんは、俺よりもっと深くまで何かを推理しているように見えた。

「一般人から見た警察の印象としては、ありえる話ね。でも、警察に黙って子供を預けるってことは……」

この先輩刑事にしては珍しく、語尾を濁した。

それをフォローするかのように、高木さんが言葉を紡いだ。

「警察に対して、何か後ろめたいものがあるかもしれませんね」

俺はどきっとして思わずひかるくんを見た。

腕を左右にゆっくりと揺らす高木さんのゆりかごで、当の赤ちゃんは「すぴー」と寝息を立てていた。

警察に対して後ろめたい、ってことはこの子の親はもしかして、

犯罪に手を染めてるかもしれない……？

佐藤さんが歯切れ悪かった意味がわかって、俺も戸惑った。そんな空気を察して、高木さんはあわてて言った。

「あ、でもこうやってひかるくんをわざわざ刑事の車に乗せたのだから、矛盾してるかも」

確かに。

犯罪に手を染めた人が、自分を捕まえる刑事の車に子供を置くはずがない。

「いや、もしかしたら罪を犯したからこそ子供には真っ当であってほしいと願い、佐藤さんの車に置いた可能性はあります」

うわ、びっくりした。

俺の背後からぬっと首だけが出てきて、振り返る。

そこには、いつの間にか戻ってきていた白鳥さんがいた。

確か、殺人事件の捜査で米花署に今日は行ってたはず。

「あら白鳥君。捜査はどうだったの」

「もちろんあれしきの事件、すぐに解決しましたよ」

髪をかきあげそうな雰囲気です。白鳥さんはふっと笑った。

「そういえば、米花署の知り合いから聞いたんですけど、例によって例の如く名探偵がふらりと来たとかで」

「そんなことより、この赤ちゃんのことなんだがね」

ああ、やっぱり白鳥さんじゃなくてあのちよび髭の名探偵が解決したのか。

妙に交番や所轄に知り合いの多い高木さん（多分人柄のおかげ）の情報を強制シャットダウンして、白鳥さんは咳払いをした。

「今までの話を総合すると、これまでもしくは現在事件に関与してて、戸籍上子供がいるはずなのに何故かいらない親を探せばいいということになるのかな？」

「あと、現在登録している住所から失踪している人ですよね」

「そうね。家から赤ちゃんがいなくなって親だけが住んでいれば、近所が不審に思って警察に通報しそうだわ。でも旅行に行くとか言って親子でいなくなれば、通報は無いはず」

徐々にだけど、俺をおいて後の三人はどんどん推理を進めていく。いや、俺だって推理をさぼってるわけじゃないけどさ。

俺はじっくり腰を据えて考えるほうなんだって。

反対に、目の前の三人、特に佐藤さんや高木さんは直感でぱっと考えられる人たちなんだ。

一度スイッチが入ると、推理の結末が見えてくるまで戻ってこないことが多い。

今もきつとそんな状況なんだろう。

ひかるくんを左右に揺らしてあやしていた、高木さんの腕が止まっていた。

「ひかるくんは生まれて一年もたっていないません。生まれる前後に何か事件を起こすとは考えにくいですよね」

「それもそうだわ。しかも、臨月の状態の時ならなおさら。やっぱりひかるくんが生まれた後に起こった事件から探しましょうか」

「ふむ、あとはもう少し地域が限定されれば探しやすいだろうけど」

白鳥さんが腕を組んで窓の外を見た。

灰色がかった雲が空の中で濁んで、すっかり今は深夜だ。

「そもそも、親は生きているのか……？」

その言葉で、場の空気に一気に緊張が混じった。

言った白鳥さん本人も、自分の無意識の言葉にぎょつとしていた。俺はそんな予想、全然したことなかった。

ああ、でもそうか。

自分は死ぬから、子供は置いて行っただ。

そんな展開もありえなくはない。

一方佐藤さんと高木さんは、そこまで驚いた顔はしていなかった。言葉にせずとも、薄々その可能性も気づいていたんだろうか。

でも、でも。

そんな悲しいことが本当にあったなら。

「……ふえ」

え？

甲高い小さな声がした。

探す手間もなく、それは突如起きたひかるくんのものだとわかった。

目をしょぼしょぼさせたかと思えば、もともとピンク色の頬がどんだん紅潮していった。

お人形のような両手を万歳の形に持っていく。

反対に、ひかるくんを抱く高木さんの顔から見る見るうちに血の気が引いていった。

あまりの青ざめように俺は心配する。

「た、高木さん？」

「やべっ」

久しぶりに聞いた高木さんのくだけた言い方と共に、けたたましい赤ちゃんの泣き声が一課の部屋に響きわたり始めた。すごい声だ。

わんわんと、いやがんと泣き声はヒートアップする。

絶望とはこんな音なんじゃないだろうか。

そう思えるほど、赤ちゃんの泣き声は迫力があつた。

この小さな体にこんなに声を出す力があるんだ。

感心したかったけれど、それよりも絶望のほうが先にきてしまい、どうしていいのかわからなくなる。

観察している俺でそんな感じなんだから、抱いている高木さんはもつとあわてた。

揺すっても高い高いをしても、ひかるくんは泣き続ける。

「こっちに！」

「は、はい！」

佐藤さんがすかさず抱きかかえたけど、泣き声は止まなかった。

てか、この二人でだめならどうなの！？

あまりの大声に、一課の刑事全員がおろおろし始めた。

「おい白鳥！ お前が死んだとかいうからだろ！」

「僕のせいですか！？ ていうか、僕は死んだとは言ってませんよ、生きてるのかってつぶやいただけですよ！」

「どっちにしろ意味同じじゃねーか！」

先輩刑事の見事なツツコミもむなしく、更に声は大きくなる。

もう駄目だ。

絶望よこんにちわ。

俺がそんな混沌とした思考に陥りそうになった時。

「なんだなんだ。相変わらずガキの泣き声はうるっせーな」

小指で耳の穴をほじりながら、名探偵・毛利小五郎が扉の前に立っていた。

彼は救世主か！？

それとも絶望への案内人なのか！？

なな／＼ウエルカム・絶望／＼（後書き）

高木は原作でもたまにぼろつと敬語や丁寧語が抜けた言葉が出るのがツボです（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8499g/>

BABY☆パニック！

2010年10月8日23時19分発行